

# 「わたし」を育む

舞踏家・仮面屋おもて店主

大川原脩平

おかわら

しゅうへい



高校生の時に、地元青森の舞踏家・福士正一に弟子入りをした。市場や寺社など、路上でのパフォーマンスを通じて、日常を異化することを試みている人だったが、1960〜70年代のアンングラ演劇や暗黒舞踏など、その時代の空気感が感じられ、とても刺激的だった。青森は劇作家・寺山修司が生まれた土地であり、三沢市には記念館がある。寺山が主宰した『演劇実験室◎天井桟敷』の中心メンバーだった佐々木英明さんがその館長を務めていて、当時の話を聞いたり、実際に寺山作品に携わったりする機会もあった。地方に暮らす2000年代の高校生としては稀有な体験だったと思う。

進学に伴って上京し、大学ではパフォーマンスアート全般を学んだ。学業を通じて、様々なジャンルのアートや、それに携わる人たちとの交流を徐々に深めるようになった。また、舞踏に軸足を置きつつ公共の財源で行われるアートプロジェクトにもかわるようになった。東京では劇場を中心とした上演文化が主流だったが、アートプロジェクトの中には劇場の外で何かを起こそうと考えている人がいるように見えた。私は舞台上でのパフォーマンスよりも日常生活で人間がどのような動きや振る舞いをするのかに興味があった。

卒業論文で、演劇のトレーニングに使用される仮面を取り上げた。分ち難い自分の身体よりも距離

を持って対象を眺められると思ったからだ。その後、坂爪康太郎という仮面作家との出会いをきっかけとして仮面専門店をオープン。日本最大級の展示即売会「TOKYO MASK FESTIVAL」を主宰するに至り、これがかなりわいの一つとなった。

仮面、というとかなり特異な趣味に思えるかもしれないが、お店で扱うものは幅広い。世界中の通過儀礼で仮面が用いられるように、人生の節目に仮面との出会いを求めにくるお客さんも多い。顔は本人のアイデンティティと密接なかわりを持つ。日々の営みに付随する役割を脱いだり、「本来の自分」と向き合ったりするための装置として、仮面の寄与するところは大きい。顔のない人間はいないが、その顔がただ一つではないというのも自明のことである。



アフリカンマスクや伝統芸能の面など、前時代的なイメージが付きまとう仮面だが、現代の

私たちの生活の中にも確かな手触りをもって存在している。職場での役割と家庭でのわたしはもちろん、SNSにおけるアイコン、VRのアバター、日々の服装やテーマパークの着ぐるみまで、仮面の拡張例は挙げればきりがなく。そうした気軽に使える仮面がいよいよ増殖している昨今、これらすべてを等価なものとして捉えるおもての視点はますます重要になってきているように思う。そもそも仮面とは、一般的には、異界をつなぐ扉、あちらとこちらに境界を発生させる装置である。そこに何が表象され固定されているか、が重要である一方、より密接に仮面と接するわたしの部分は溶解し揺れ動くのが通常だ。ふと世間を眺めると、揺れ動く、わたしの波に耐えきれない者、複数の自我が同時に存することを認められない者がたくさんいるように思えてならない。世間からの新自由主義的なプレッシャーも根強い。仮面の下に豊饒なわたしを育む機会はどんどん減っている。

仮面と接する訓練を受けた俳優もめつきり少なくなつた。俳優は、一生をかけて仮面との付き合いを学んでいくものだが、自分自身と向き合うことは、それ以上の難題である。自分のアイデンティティを揺るがすような経験を引き受ける前に、たまさか出会った仮面と向き合ってみる。そのくらいから始めてみるのもいいのかもしれない。

## 時の調べ Essay

略歴  
株式会社その代表。舞踏家福士正一に師事。「ものをつくりたい」ことを活動の軸として掲げ、従来のダンスの枠を超えたアートプロジェクトの設計やコンセプトデザインを行う。企業や教育機関での研修やファシリテーションでは、徹底的にプロセスや成果物を脱構築し続ける。日本における新しい仮面文化の創造をテーマに、日本最大級のマスクの展示即売会「TOKYO MASK FESTIVAL」の実施をはじめ、仮面に関する総合的な活動を行う。日本で初めて現代作家の仮面を取り扱う仮面専門店「仮面屋おもて」を2014年に開店、たばこ屋のふりをしたトランプを販売する「うそのたばこ店」を2019年に開店